

て居りますから、差入れものも出来ないと思つて、差入物をして遣つたり、小勝様の家へ行つて、小使を遣つたりしました。後で聞いて見ると、小勝様は探偵で、東京では貧乏に見せかけて居たが、國では地所を買つて居たと云ふぢやありませんか。」

### 中野静岡に漂泊す

中野は丹波龜岡藩の士である。京都府南桑田郡龜岡町の生れで、静岡の生活をはじめたは、明治十年であつた。中野は早くから英漢の學を脩めて、神戸で通辯も遣つた。鐵道會社にも奉職した。小學教師にもなつた。明治十年には、滋賀縣の警察で警部を遣つて居たが、警隊備に充てる巡査を百名募集して、それを連れて警視廳へ行つたが、上官寺島秋輔と意見が合はないので、辭職した。其時は丁度北海道の經營に心が傾いて、「北門鎖港論」と云ふ論文を書いて居た時分だから、警視廳を辭職すると、其論文を持つて、當時の北海道開拓使長官黒田清隆を訪ふた。

最初三田の黒田邸に行つた。黒田は其日、馬車に乗つて門口を出やうとして居た。來意を告げると、明日來いと云ふ。約束の如く行つて見ると、門番が立塞つて門口から内へ入れない。西郷派の刺客が、黒田はじめ、政府派のものを覘つて居る時であつたので、中野も疑はれた。翌日も、其翌日も行つたが、面會が出来なかつたので、兼て用意して居た五六本の白墨で、門の柱へ落書して歸つた。翌日又た行つて見ると、今度は逢つてくれたが、落書の無禮を頭から怒鳴られた。中野は臆せず云つた。「貴君が無禮をとがめるよりも、明日來いと云つて、僕を欺いた貴君の罪は何うです。」黒田は此言葉に、グツと中野を買つて、開拓使に雇つてくれた。

中野は、それから芝御成門の内にあつた開拓使廳に出勤して居た。其年の十月十日には、北海道の本廳に行く事となつたが、其間際になつて、官金の自由になる所から、二三人で官金を擲出して、吉原で豪遊を極めた。それを密告するものがあつたので、上官の前に呼ばれて諭示免職にならうとした。「官金を費消したものは、僕一



人でない。上は黒田長官から、皆官金を費消して居る。僕は皆知つて居るんだ。僕の事も公の手續にして裁判沙汰にしてくれたら、廳内の事をすつかり世間へ發表して遣る。」中野は斯う云つて、澄まして居るから、上官も持てあまして、本廳の方で採用して遣るから、表面上辭表を出せと云ふ事になつた。中野は其言葉に従つて北海道に渡る積りで、川上と云ふ書生を連れて横濱へ行つた。

北海道行の汽船は、玄武丸と云ふ汽船で、其年の最終の航海を遣ると云ふ事になつて居た。行つて見ると、船は未だ出帆しないので、其夜は手荷物一切を旅館に預けて、川上を連れて高島町の女郎屋へ遊びに行つた。二三日流連して歸つて見ると、手荷物を窃まれて居る。そして中野の懐中には最う一圓五十銭しかない。これでは無論北海道にも行けない。それかと云つて、東京に引返すも厭である。寧ろ陸路を京都の方へ歸らうと思つて、横濱を出發した。

奥津の浦安場へ來た時には、最う一錢の橋賃がなかつた。頑固な橋守は、二人を遮つて通さない。二人が橋守小屋の前で、談判して居ると、幌掛の俵が來た。二人の事を聞いたのか、車の中から橋賃がないのかと云つて笑つた。中野は勃然と怒つた。突然手にした洋杖で幌に叩きつけると、幌の紐が切れた。中には土地の富豪の若旦那らしい壯健が乗つて居る。橋守はそれに吃驚して、橋賃はいらないから通れと云つた。「わが輩は、只は通らない。こゝに手拭があるから、それを質にして置く。」と云つて、中野は腰の手拭を置いた。其日は江尻で日が暮れた。二人は羽織も既になくして居るので、川上が頸へ巻いて居た絨段の片を三朱に賣つて、それで牛鍋をつつき、其夜の内に静岡へ入つた。中野は、其所で旅費を作る積りで、中野の「獄半」と云ふ郷宿へ入つた。それは地方の有志が出て來て、下宿の如くして滞在する旅館である。其所へ來る客は、滞在客と極つて居るので、普通の旅館の如く、直ぐ宿泊料を取りに來ない。中野はそれを目的に入つたのである。二人とも羽織はないが、中野は黒羽二重の袴を着て、下に黄八丈を重ね、帽子は黒の山高と云ふ



扮装をして居たので、鉄半でも怪しまなかつた。

翌日になつた。中野は早速静岡警察署へ行つて、應接に出た堀次郎と云ふ一等巡査を捉へて、旅費を申込んだ。すると堀巡査は「金子は貸さない事もないが、其の手續が至極むつかしい。夫よりか少時此所へ奉職したら何うだ。」と云ふ。中野も京都へ歸つたつて、別に何をすると云ふ的もない。都合がよければ遣つても好いと云ふ氣になつた。「直ぐなれるか」と聞くと「直ぐと云つても、こゝ一ヶ月はかかる。」と云ふ。それでは宿泊料の間にあはない。堀巡査は、鉄半の方は都合よく云つて遣ると云ふので、詮方がなければ、それを遣る事にした。其歸りに、静岡新聞へ寄つた。丁度主筆が缺けて居る時であつた。新聞社の方では、中野に記者の腕があるとは思はないから「職工の方は最う空席がない。」と云つた。中野は「記者になりたい。」と云ふと「それでは明日來てくれ。」と云ふ。翌日行つて見ると、何か書いて見よと云ふ。「菊」と云ふ題で、一寸した文章を書いて見せると、採用せられた。

月給は二十五圓。それを前借して、書生の川上を國へ歸した。

### 金谷原の探險

中野は何時の間にか、静岡に腰をおろした。然し新聞記者では、金子が取れないので、代言人になる積りで、當時静岡に名ある鈴木辰三の家へ出入して居た。

其時金谷原に、徳川氏の臣下が集つて、一封建國を建設して、未だに帶刀して居るものもあつた。一方では茶を作り、一方では徳川家の金子を附近の各村へ貸付けて居た。志太郡志太村でも、村民が同盟して、其金子を借りて居たが、不作が三年ばかり續いたので、期限が來ても、返却する事が出來ない。其爲めに、山崎藤三郎と云ふ志太村の總代は、金谷原へ拘引せられたが、金谷原の副隊長鳴瀬治久の家に、生埋めになつて居ると云つて、志太村の村民は、之れを金谷原の警察に急訴した。未だに封建時代の夢を見て居る金谷原のものは、直ぐ刀を閃かすので、静岡警察署でも



如何ともする事が出来なかつた。其様な有様だから、金谷原警察も、恐れて手出しをしない。其所で志太村の村民は、静岡警察本部へ急訴したか、本部でも取上げない。今度は詮方なしに、鈴木代言人の許へ頼んで来た。鈴木は、其様な事は、おれの力に及ばない。」と云つて、頭から謝絶した。

中野は其日、丁度鈴木に行つて居た。鈴木の謝絶するのを聞くと、おれが行つて、藤三郎を取もどして遣らう。」と云つた。鈴木は手を振つて止めた。「いかん、君は何も知らないから左様云ふだらうが、眞箇に斬られるんだ。其様な事をしたら生命がないせ。」それでも中野が行くと云ふと、それでは、鈴木の家で頼まれたと云つてくれては困る。」と云ふ。

中野は其日村民に連れられて志太村へ行つた。そして金谷原の事情を精しく調べた上で、薩摩芋賣の農夫に化けて、籠を背負ひ、頬冠をして、金谷原へ行つた。目指したのは、隊長忠條金之助の家である。玄關へ行つて、静岡新聞記者と肩書した

名刺を出して、主人に面會したいと云ふと、座敷に通された。忠條が出て来ると、志太村民の爲めに、藤三郎を連れに来た事を話して、聞けば藤三郎は、鳴瀬の柿の樹の下で、生理めになつて居ると云ふ事ですが、明治昭代の今日、奇怪千萬では御座らぬかと云つて、忠條をせめた。忠條は驚いて、決して其様な事はないと云ふ。然らば鳴瀬の家へ立會つてくれと云つて、忠條を連れて、二人で鳴瀬へ行つた。果して藤三郎は、庭前の柿の樹の下に、胸まで埋められて居る。其日で丁度七晝夜であつた。奇怪な制裁、中野は勃然と怒つた。忠條もまさかと思つて居たのが、それと見ると、大に鳴瀬を叱りつけて、藤三郎を穴から掘出し、再び中野を我家へ連込んで、今度の事は、何うか秘密にしてくれまいか。」と云ふ。中野はさんく、油を取つた上で、秘密を守る事にした。藤三郎を連れて、揚々として志太村へ歸つた。

中野の名は、其時から静岡縣下へ知れ渡つた。種々の事件の代言を頼みに来る人が次第に多くなつた。又金谷原の方でも、中野の人物を信用して、貸出金十四五



萬圓に對する代官事項は、皆中野に托する様になつた。

### 静岡縣下の民權運動

其内に明治十三年となつた。自由民權の氣運が縣下に動いた。これより先、前島豊太郎等二三の有志が、參同社と云ふ演說會を設けて、政治でもない、學術でもない、普通の演說を遣つて居た。中野もそれへチヨイ／＼顔を出して居た。自由民權の氣運が動くと共に、參同社の連中は、一番に之れに赴いて、自由民權の運動を遣る事になつた。其所で、静岡方面を前島、濱松方面を中野が運動する事になつて、中野は其時から濱松へ移つた。其結果、静岡方面には、岳南自由黨が出来、濱松方面には、遠陽自由黨が出来た。岳南自由黨の首領山岡音高は、未だ無名の一青年であつた。

### 俠客山田八十吉

中野が濱松へ移つて、自由民權の運動を初めた當時の事である。「この濱松へ着て乃公に挨拶しないと不埒な奴だ。」と云つて、中野の舉動を嫉視して居た俠客があつた。これが山田八十吉で、方十人を兼ねると云ふすばらしい亂暴ものである。中野も俠客山田の事は知つて居たが、自分は藝人でない。苟くも自由民權の運動に従事する志士だ。俠客なんぞを眼中に置くべきものでないと、眼中に置かなかつた。

ある日、演說の事で警察へ呼ばれて、最う歸らうとして居ると、山田が来て、貴君は中野様ぢやありませんか、と云ふ。左様だと云ふと、「お名前を伺ふばかりで、未だお目にかゝりませんでした。今日の一つお交際を願はれますまいか。」と至極丁寧に云ふので、中野は承知した。中野の連れて居た書記と、警察の書記と



が加はつて、一行四人で、直ぐ近くの料理屋で飲んだ。

酔が廻つて來た。腹に一物あるらしい山田は、中野に向つて腕押を遣うとか、座角力を遣うとか云つて、うるさく纏はつた。中野は最初は逃げて居たが、詮方なしに最後に座角力を遣つた。中野は山田の敵でないことは無論である。それでも遣つた。中野は下に組んで、拳を山田の腹に當て、猛烈な山田の腕力を支へて居たが、此様なくだらん腕立するのは馬鹿らしいと思つた。で拳を引くと、山田は軽々と中野を倒したが、忽ち中野の起上らうとする頬べたを二つ三つ撲りつけて、「山田八十吉を知らないか、ヘッポコ書生奴ツ。」

中野は、腹は立つたが、思返して其儘我が家へ歸つた。そして細君に命じて、かすのこを二圓ばかり買はして、それを山田の家へ送らし、昨日御馳走になつたお禮だと云はした。

五六日すると、山田は中野へ來て、前日の不都合を謝して、今日仲直りをして貰ひ

に來たと云ふ。中野は山田に酒を勧めた。山田はそれを飲みながら、「時に先日は、かすのこを澤山貰つたが、あれは何う云ふ意味でせう。」と聞いた。「あれか、あれは外でもない。お前は、彼かすのこの取れる所を知つて居るか、中野は斯う云つて山田の顔を見た。山田は北海道だと答へた。「左様だ、北海道だ。其北海道には、どんな人間が居ると思ふ。アイヌと云つて、野蠻人が居るだらう。ぢやかすのこは野蠻人と云ふ印だらう。でお前に遣つた。それが一斗も一斗五升もあつたのは、昔から斗屑の輩と云つて、人間として數える事の出來ない奴は、拵て一升二升とはかつたら好いと云ふてある。丁度お前の様なものだ。」中野の言葉は鋭く山田の心をえぐつた。山田は恐縮した。そして、「今日から自由黨の仲間へ入れて下さい。」

外に何も出來ませんが、演説を邪魔する反對黨の奴を、片つ端からやっつけます。」爾後山田は、中野の片腕と頼まれて、遠陽自由黨の戦士となつた。傲然たる山田の姿が會場の入口に見へて居ると、反對黨の彌次馬は聲をひそめた。



## 赤井景韶の死刑

静岡縣下の民権運動は、年と共に隆盛に赴き、岳南自由等の重鎮山岡音高等も此時新に入黨して、黨勢ますます振つた。此と共に政府の抑壓は、日一日と加はり、静岡の民権家も、福島、茨城、栃木、愛知等の諸縣に於ける民権家と同じ道程を歩まざるべからざるの運命に陥つた。集會條令違反、官吏侮辱罪等に問はれて、拘引せらるゝ者が續々として相踵いだ。赤井景韶が、石川島の監獄を破獄して來たのも、此多事の場合であつた。

赤井は越後高田の民権家である。明治十五年十一月、丁度福島事件の頃、鈴木昌司、八木繁祉、井上平三郎等云ふ同士と、政府顛覆の隱謀をめぐらしたが、發覺して、高等法院で裁判の結果、赤井のみ重懲役九箇年に處せられた。河野廣中が、石川島の監獄で誠めた赤井は、其人であつた。血氣にはやる赤井は、河野の言葉に耳をかさ

ず、遂に破獄した。其上殺人罪を犯して、最初は東京の政友の許に匿れて居たが、警視廳の物色がはげしいので、山岡をたよつて静岡へ來た。山岡はこれを清水綱義の家に匿くした。清水の邸は、静岡市廓外の田舎にあつたから、一箇月ばかりは、無事であつた。然し漸く發覺の恐れがある様になつたので、中野をたよつて濱松に向つて出發した。早朝であつた。一里半ばかり來て、大井川の橋にかゝつた。ある人の密告によつて、赤井の來るのを待受けて居た警官は、矢庭に赤井を捕縛した。中野曰く、赤井を密告したものは、清水だと云ふ事だが、確にはわかりません。無慘にも懷に入つた窮鳥は、遂に捕へられた。赤井はそれから東京に護送せられて、遂に死刑になつた。中野の細君が、やさしい女心に、裏の山から白百合の花を折つて來て、其日死刑にならんとする赤井を弔つたのは、其時であつた。



## 全國的大動亂準備

躁急過激。當年の自由黨員と云へば、殆んど狂犬の暴れに暴れた如き感があるが、渠等が産を破り、家を失ひ、父を捨て、子に離れて、専念憲政の樹立に奔走した熱誠に至つては、實に尊敬すべきものがあつた。渠等は其爲めに、内亂も企てた。暴動も起した。殺人も遣つた。甚しいは強盜も遣つて、敢えて絞首臺上の人となるのを恐れなかつた。憲政樹立の爲めには、渠等は如何なる代價を拂つても構はないとして居た。静岡の民権家も左様であつた。渠等は政府が自由黨に對する所置と、意嚮とを見て、二十三年の國會開設も、一事の子供だましに過ぎないとした。其結果、渠等は、今の政府によつて、憲政を樹立せんとするのは、木に縁て魚を求むるにも劣つた愚策である。で、我黨の目的を達するには、今の政府を顛覆して、自由黨の政府を作らねばならぬとした。然し軍隊と警察を持つた政府を顛覆するには、一

地方の爆發位では不可である。それには大仕掛な全國的大叛亂を起さねばならぬと考へた。

其所で手を分つて、各地の民権家と謀を通じた。飯田事件の村松、八木、川澄、名古屋事件の奥宮、久野、塚原等と手を握つたのも其時であつた。當時、茨城、栃木、宮城、秋田、福島の間では、東北的大叛亂の隠謀が計畫せられて居た。秋田縣の舊自由黨員石塚三五郎曰く、加波山の連中が期を愆まつたもんだから、計畫はめちやく／＼になりました。私は其時、秋田の自由黨を率ひて立つ積りで、國へ歸つたもんです。其前にも、仙臺で事を起す積りで、仙臺鎮臺を焼く企をした事がありました。言葉によつても、當時の民権家が如何なる手段を取らうとしたか、略ぼわかる。静岡の方でも、山岡音高が茨城へ行つて、宮松等と會合した。丁度明治十七年の春で、中野は其時東京に居て、同志を募つた。宮本鏡太郎等が此に與した。然し政府の密偵が民権家の一舉手一投足にも眼をつけて居たから、用心に用心を重ねたも



のだ。山川善太郎とも度々會つたが、其舉動が怪しかつたので、何事も言はなかつた。

### 徳川慶喜擁立の計畫

全國的大叛亂の計畫は略ぼ成つた。然しそれは唯漫然となつたばかりで、實際に當つて駈起する時の事は考へてない。中野、山岡の二人は、相談の結果、當時静岡に隠居して居た前將軍徳川慶喜を擁立せんとした。左様なると金谷原の人馬を用ふる事が出来る。のみならず當世に不平ある舊士族を網羅する事が出来る。其所で中野は、志太村事件から懸意になつた鳴瀬治久の所へ行つて、政府顛覆の計畫を話した。不平滿々たる鳴瀬は、大に賛成して、金谷原には、鐵砲は少ないが、刀劍はいくらでもある。」と云つた。中野は喜んで歸つた。然し再び行つて見ると、慶喜公に累を及ぼすと云つて、忠條が承知しないから、刀劍だけは御用達する。」と云

つて、心を翻したので、慶喜擁立の事は斷念したが、叛亂の準備は怠らなかつた。然るに其年の九月になつて、加波山の暴動と共に其計畫は破れた。續いて秩父の暴動、飯田事件、名古屋事件と續發したので、舉兵の困難な事が分つた。のみならず其十月、自由黨が解散になつて、各地との連絡が絶えたので、ますます、舉兵が出来ない様になつた。

### 舉兵主義、暗殺主義に變ず

舉兵主義は暗殺主義に變じた。近き經驗によつて、舉兵の不可能を知つた同志は、遂に暗殺主義を取つて、爆彈の製造に取りかゝり、傍ら決死の同志を募つた。

川村矢一を同志に引入れたのも、其時であつた。渠は有名な擊劍家で、維新後は山中に入つて、炭焼を業として居たのを、中野が行つて連出して來た。中野は又た名倉良八と云ふ商人を同志にした。渠は金子こそないか、策畧のある男である。



中野はそれに命じて横濱から汽船を借入れさせる爲めであつた。十六歳の時に、父の復讐をしたといふ小山徳五郎も、中野の手で同志にした。山岡の方でも種々な人を同志にしたが、露見を恐れて、同志の間でも、何人を同志にしたと云ふ事は云はなかつた。然しそれでも、秘密が漏れるので、中野山岡の二人は其方法を考へた。秘密を漏らすと云ふのは、契約の固くない結果である。一度契約して生死共に相許したものは、飽迄も其契約を守らさねばならぬ。然るに、道德頹敗して、人に信用がなくなつた當世では、唯血を啜つたばかりでは不都合である。何とか方法を立て、同志の反覆を拒がねばならぬ。——二人はさまざまに考へた。忽ち二人の心に浮んだ方法がある。二人は顔を見合はした。「何かあるかね」と中野が聞くと、山岡が云つた。「一つあるが——君は、僕にも一つある。」と中野が答へた。「何かね」「何つて——左様だな」と二人は又た顔を見合はしたが、双方とも如何な事であるとは云はない。「それでは掌に書いて一度に見せ合はさうぢやないか」と中野が云

ふと、それが好からう」と山岡が賛成した。

二人は硯を取寄せた。静に墨を磨りながら、各筆を取つて、自分の左の掌に書いた。そして一度握つて又た顔を見合はしたが、少時して「ぢや出さう」「左様だ。」二人は掌を仰向にして、拳を開いた。

### 強盜罪を犯して反覆を拒ぐ

強盜犯——これが二人の掌にあつた文字である。二人の方法は期せずして相合した。二人は同志になつた者に、それ〱強盜罪を犯かさせ、彼等を死地に陥れて、其決心をかためさせやうとした。

二人は遂にそれと定めた。そして同士に加名したものがあると、必らず強盜に遭つた。金圓衣服の類、何によらず強奪さして、一方にはそれを貯蓄して、事を上げる日の費用にする事にした。其時に小勝俊吉は、度々静岡へ探偵に來たが、山岡は



それを知らずに、これも同志に引入れる約束をした。そして規則に従つて、強盜をやらせる積りで、小田原に連れて行つたが、途中から逃げられた。

又た湊省太郎の手から同志にした長湖伊助と云ふのは、純粹の強盜であつたが、後まで何人も知らなかつた。然るに同志が捕縛になつた時、裁判官が長は純粹の強盜だと云つたので一同は驚いた。中野曰く、「裁判官がお前方は立派な事を云つて居るが、長は前科のある純粹の強盜ぢやないかと云つたので、驚きました。」

其他、同志になつたが、強盜を遣る勇氣のないものは、膽力のある同志に頼んで、其證據になるものを強奪して貰つて、それで責をふさいだものもあつた。

### 金指町の強盜

十八年の九月頃の事である。中野が指揮して金指町へ強盜に行つた。濱松から四里ばかり離れた田舎町で、戸數は千戸位、茶の出来る所である。其所に銀行が

あつて、茶の時期には、銀行で茶を買込むので、茶の商賣を遣つて居る者は、非常に銀行を怨んで居る。中野はこれを聞て、其様な銀行なら、押入つて、金があるなら金を引出し、帳簿から株券の類は、めちやくに破つて了へと云つて、五人の同志を連れて金指町に行つた。

本道を通らずに三方ヶ原を横切つた。原の中で夜の更けるのを待つて、十一時過に銀行へ押込んだ。田舎の小銀行の事として、銀行には小使が一人しか居ない。六人は突然小使を捕へて、眼前に短銃を差付け、金庫の詮義をしたが、鍵を支配人が持つて歸つて居るので、何うする事も出来ない。小使を六人で取巻いて、銀行から二丁ばかり離れて居る支配人の家へ案内さした。

鷹に捕られた小雀とは、其小使の事であらう。逃げるか、聲を立てるかすると、六人の懐に呑んで居る短銃、刀の類が閃めくので、慄えながら六人を案内した。

やがて支配人の家に行つた。六人は小使を逃がさない様にして、其家へ闖入し



た。主人の支配人は慄えながら鍵を出して来たが、恐しいので顔を上げない。俯向いたなりに差出すのであつた。中野はそれを受け様とした。殆んど同時に、邸内で金扇を打鳴らす音が、けたたましく起つた。非常を知らずする警鐘である。

忽ち四方が騒がしくなつた。六人が驚く間に、家の四方は、火事の用意をして、手に鴛口の類を持つた町民に取囲まれた。六人は最う絶體絶命である。中野は云つた。「斯うなつては、ちり／＼になつては危険だ。一列になつて、血路を開らなくちやいけないが、それには一番前の者が右を斬り、次が左を斬り、其次が又た右を斬つて逃さう。それには、町民を驚かす必要がある。天井に向けて二三發短銃を打て。」聲に應じて山田八十太郎が短銃を三發連發した。

すると戶外では、火事ぢやない強盗だと云ふ聲がする。時は今である。それと云ふ間に、六人は一列になつて群がる町民の内に突進した。當るを幸に、且つ斬り、且つ走つて、田甫道へ出た。其夜町民の負傷したものは、二十餘人あつた。町民は

恐れて長く追つて來なかつた。其夜は雨催の空が曇つて居た。六人は稍安心して、少しく足をゆるめて走つた。不圖聞くと、後から追かけるらしい一人の足音がする。それは金指警察で、巡査に撃劔を、教えて居る劔客である。

「六人と知つて、一人で追かけて來る奴は、腕に覺えのある奴だ。何うかしないと露見する。」と中野が云つた。小山徳五郎が短い刀を持つて引返した。宮本鏡太郎も同じく引返して、小山に力を添えて、劔客を滅茶／＼に斬つたが、殺しはしなかつた。宮本は翌日何喰はぬ顔で、金指へ行つて、金指の風聞を探り、且つ自分の斬つた劔客に逢つて、「先生何うしましたか。」と聞いた。劔客は面目なげに云つた。「昨夜は六人の強盗を追かけて、それに取まかれて遣られたんだが、強盗の方へも小手を入れてあるから、直ぐ捕まるさ。」宮本はおかしさを忍んで、「左様ですか、そいつは不埒な強盗ですな。」



## 爆彈の試験

強盜と爆彈の製造。これが暗殺主義を取つた同志の仕事であつた。然し強盜は客で、爆彈は主である。

ある時、中野、山田、足立の三人は、爆彈の効力を試験するために、鮎釣の風をして天龍川の奥六里の山間へ入つた。疊八疊敷もあらうと思はれる様な巨巖が、脚下の谿川に突出て居る。中野は辨當柵に入れて、小さな風呂敷に包んで領に巻いて居た爆彈を取出した。軍銃のケースに仕込んだもので、綿で包んで辨當柵に詰める。と五六個は入るのである。中野はそれを取つて、件の巨巖へ向けて投付けた。天地も頽れる様な音と一所に、巨巖は粉碎した。四里半も下流にある二岐と云へる土地に聞えたので、同地駐在の巡査は不審に思つて、詮議に来たが、途中で三人の歸るの行逢つて、お前達は、何か大きな音をきゝはしなかつたか、と云つた。三人

は聞かないと云つて、巡査と別れて歸つた。

## 天皇陛下箱根離宮御成

十八年の天津風。同志が待ちに待つて居た機會は、忽ち眼の前に到來した。かねて新築中であつた箱根離宮が、十九年七月十日に落成するので、天皇陛下が諸大臣を随へられて御成になると云ふ事である。箱根の山中に潜伏して、諸大臣を壓殺し、天皇陛下を擁して、天下に大義をとなへると云ふ手筈は、咄嗟の間になつた。

手筈が定まると、箱根の山中を探險する必要がある。然し探偵に尾行せられて、大事發覺の恐があるので、一人々々になつて遣つた。辨當柵に詰めた爆彈を領に縛りつけた同士は、伊豆山の方から箱根の谷々にかけて隈なく跋渉して、事を舉げる日の進退を自由にせんとした。そして又た警視廳と、静岡警察とに同志の秘密探偵を入れて、警視廳が静岡の民権家をどれ位迄に警戒して居るか、と云ふ事を探



らした。静岡警察の刑事眞野信仍等は、同士の秘密探偵に引入れたものであつた。そして同士が打つ電報は、警視廳と同じ暗號を用いたものだ。

箱根の谷々を跋渉した主なるものは、中野、山岡、湊、宮本等であつた。そして同士の潜伏する場所も定めて、七月の三日には、要所々々へ一同を集合する手筈も出来た。

中野は、其頃、鳳雛舎と云ふ私塾を開いて居た。七八十人の生徒があつて、小學中學の科程を教へて居た。中野曰く、七月十日には斬つて斬つて斬死する覺悟だから、何をするのも厭でしたが、妻などが困るゝつて、八釜しく云ふから、仕方なしに塾を開いたもんです。「細君絲女は曰つた。「彼頃は毎日酒ばかり飲んで何をして居るやら薩張りわからなかつたんですが、捕えられた後で吃驚しました。それも最初の日には、國事犯人とか何んとか云つて、大きな活字で新聞にかいてあつたものが、其翌日になりますと強盜となつて居るぢやありませんか。」

### 發覺と同志の逮捕

すべての手筈が定まつた。大勢が静岡に居て、會合して居るのは、政府の嫌疑を受ける劣策だと云ふので、山岡はじめ、岳南自由黨に屬する同志の大半は、思々に上京した。中野は濱松にあつて、鳳雛舎の生徒を教授して居た。教授しながら、七月十日の事を考へた。青葉照り榮ふ箱根山中に、血を浴びて奮闘する自分の姿を想像した。中野は其時三十三歳で、細君は二十八歳であつた。

胸を躍らして事を擧げる口の近付くを樂み待つた其早妻もなく、六月に至つて、隱謀は發覺した。獅子身中の蟲小勝俊吉が警視廳に密告したのである。警視廳は大に驚いて、其月の三日、山岡音高はじめ在京の同志を捕縛した。續いて静岡を中心として、附近の諸縣に於て、同志が續々として捕縛せられた。静岡自由黨の國事犯、六月三日以後の諸新聞紙は、同記事に賑はうた。



數日の間に同志の大半は捕縛せられたが遠陽自由黨の方にはあまり飛火がしない。中野は、鳳雛舎の教室で新聞にある同志の成行を見て、自分も遂に免がれざるを知つたが、敢えて騒はがない。それでも證據を湮滅する爲に、家に蓄へてあつた爆弾ばかりは地中に埋めた。中野の知人は、今の内に逃げると云つたが、中野は承知しない。其内に六月十九日となつた。其日中野の細君は、將の澤山生へた人が縛られて、豊橋方面から來たと、隣家の人から聞いて、良人の隠謀は知らなかつたが自由黨の志士と云ふ所から、良人も捕縛せられる様な事がありはしないかと心配したのであつた。翌朝になつた。四時頃である。早起の癖ある中野は、既に起きて居ると、家の前を二三臺の車が通つた。其音が中野の心に一種の不可思議な感じを傳へた。中野は細君を呼んで、今朝は警察から來るかも知らないから、これを預けて來い。」と云つて、隠謀に關係のあるものを一纏めにして、それを細君に渡した。細君は其足で、遠くもない、自分の親里へ持つて行つたが、それが漸く親里へ

到着した頃である。中野は便所へ這入つて居ると、警部が二人入つて來た。「中野様はお宅ですか、取次の者が便所に這入つて居ると答へた。中野は其聲を聞いて、便所の窓から戶外を見た。初夏の空はほのく」と白んで居る。家の前なる池の傍には霧がかゝつて、其中に、白鷺の群と見えて居るのは、それは中野の家を包圍した巡査の一隊であつた。

中野は騒がす用を便した。玄關口へ出て見ると、二人の警部が立つて居る。中野を見て一禮して、「少しお尋ねしたい事がありますから、警察まで同行を願ひます。」中野は云つた。「ちや飯を喫ふから、少し待つて下さい。」何、鳥渡で好いんです。其様なに手間はとらしませんから、其儘行つて下さい。」斯う云つた警部は、突然上つて來て、中野の兩手をグツと掴んだ。爆弾の投下を恐れたのである。中野は又た云つた。「其様にしなくつても、逃げもかくれもしないから……それちや顔だけ洗はして下さい。」警部は許さない。其儘中野を拉して出て行つた。



無辯論の服罪

中野の逮捕と共に、遠陽自由黨も一網打盡せられた。静岡事件の同志及び共謀連累の嫌疑に由りて、逮捕せられた者が、一百餘名あつた。密告者小勝俊吉も一所に逮捕せられたが、それは直ぐ許された。伊藤仁太郎なども其時嫌疑者として逮捕せられた一人である。東京重罪裁判所の所轄になつて、地方で逮捕せられたものは、皆東京へ護送せられた。中野も其内にあつた。村上佐一郎は、箱根山中でさりとすの鳴くのを聞いて、不圖一句を得た。

鳴すぎてとらはれにけり蟋蟀

罪名は忌はしい強盗罪である。最初國事犯として、國家の爲めに陰謀を畫策した志士の行動を暗に賞賛して居た新聞紙も、破廉耻罪として痛罵する様になつた。數回の審問を経て、嫌疑者は放免せられ、同志二十五名が公判に移された。角田眞

平が其時の辯護人であつた。

公判は開かれた。今にも辯論に移らんとした。中野は立つて、裁判長に向つて「同士に告げたい事がありますから、何うか一言さして下さい。」と云つた。すると角田が、「私が被告諸君に向つて、一言したいんですが、それを中野君が代つて、云ふ事になりましたから、どうか許して下さい。」裁判長は快よく一言の自由を與へた。中野は口を開いた。中野の言葉の大意はかうである。——諸君の中には、獄中で絶食するものがあるらしい。これは破廉罪を以つて擬せられたので、それに激しての事であらう。そもく諸君と約束したのは、政府を顛覆しない時には、斬死するか、法網にかゝるかの二つであつた。此様な運命に立ちいたるのは、初めから分つて居る。今更愚痴を云ふのは、男子でない。従つて辯論によりて、罪を逃れうとするのは、志士のすべき事でない。辯護士も不必要である。僕は裁判長の權能に任かして、相當の罪に服罪する積りである。——言々悲愴にして、聞くもの皆泣いた。



其結果、一同辯論を廢して服罪した。其内前島覺太郎一人は無罪になつて、他の二十四人は、強盜罪によつて所斷せられ、中野と山岡とは、各有期徒刑十四年に所せられた。他にも有期徒刑十二年になつたものが十二人、懲役、禁錮などに遣られたものが十一人あつた。其日は二十年の七月十三日であつた。

## 特赦復權

中野は最初、石川島の監獄に送られ、それから小菅集治監に移り、二十一年には空知監獄に送られて、其所で三十年七月迄居たが、其月の二十日、名古屋事件の奥宮等と共に特赦復權に逢つて、東京に歸つた。其間殆んど十年。雪の底の苦役も苦しかつたが、良人の傍に居て、良人を慰めて居た中野の細君の苦痛は、それ以上であつた。最初空知に典獄をして居た渡邊惟精は、夫人と共に、此貞婦を慰めた。中野の細君は今も渡邊夫妻の恩眷を語る。「原様を改葬した後、亭主に逢ひに行つて居る

と、典獄様が来て、中野様我家の家内が貴女にお目にかり、たいと云つて居るから、一寸寄つてくれと云つて、小使に云ひつけて、妾を典獄様の家へ連れて行かしました。行くと奥様が出て来て、いろ／＼と妾を慰めてくれた後で、お金を紙に包んでくれました。妾はお金よりも典獄様夫婦が妾の事を心配して下される程だから、亭主の事は一層心配して居て下さるだらうと思つて、うれしくつて泣きました。だから渡邊様が、一年半位して、轉任した時には、妾は眞箇に心細くなりました。

## 明治叛臣傳終



明治四十二年十月十五日印刷

明治四十二年十月十八日發行

明治版臣傳與付

定價金五拾五錢

郵稅金八錢



著者

田 岡 嶺 雲

發行者

東京市本郷區天神町二丁目二十五番地  
日 高 藤 兵 衛

印刷者

東京市神田區三崎町三丁目一番地  
小 西 幸 吉

印刷所

東京市神田區三崎町三丁目一番地  
日本印刷株式會社  
(電話本局千八百四十番)

發行所

東京市本郷區天神町  
二丁目二十五番地

日 高 有 倫 堂



# 大 賣 捌 所

東京市神田區表神保町  
 東京市京橋區中橋廣小路  
 東京市日本橋區住吉町  
 東京市神田區葛神保町  
 東京市日本橋區本銀町三丁目  
 大阪市備後町四丁目  
 大阪市心齋橋南久太郎町  
 名古屋市玉屋町  
 名古屋市本町  
 名古屋市本町  
 滋州濱松  
 京都市佛光寺通烏丸  
 京都市二條川原町  
 神戶市元町  
 岡山市  
 廣島市鞆屋町  
 廣島市東橋町  
 山口大市町  
 下ノ關市西南部町  
 筑後國久留米市

東京 前川堂  
 至誠堂  
 上田屋  
 太洋堂  
 吉寶文館  
 福音文社  
 星野文星堂  
 川瀨代助堂  
 小澤百架堂  
 谷澤島屋  
 東枝書館  
 寶文書館  
 川瀨日進堂  
 山陽書籍會社  
 積善館  
 友田藤助  
 白銀支店  
 上文山英堂  
 菊山竹

熊本市新町  
 熊本市上通町  
 筑前博多純屋町  
 信州上野町  
 信州松本市  
 信州長野市  
 越後國長岡  
 越後國水原  
 越後國新潟古町  
 高岡市守山町  
 金澤市片町  
 前橋市曲輪町  
 宇都宮市鐵砲町  
 仙臺市大町  
 弘前市土手町  
 秋田縣增田町  
 北海道札幌南一條四三丁目  
 北海道函館地蔵町  
 清國大連市大山通二丁目

長崎次郎  
 金田書堂  
 高田書堂  
 宮坂日新堂  
 松澤榮太郎  
 西澤喜太郎  
 覺張次郎  
 西村六平  
 西村支平  
 學海堂  
 宇都宮書堂  
 煥平書堂  
 內田正榮堂  
 藤崎書店  
 今泉道太郎  
 東海林  
 富貴堂  
 小島大盛堂  
 濱井松之助

四十二年拾月印刷  
 每月訂正增補改刷

## 有倫堂出版書目

東京市本郷區天神町二丁目廿五番地

日高有倫堂

振替口座東京壹八八三四番



大町桂月著 (上製)

月刊 影集

大町桂月先生の文名當代を歴せることは今更喋々を要せず其文章月として世に出でざるなく一作として愛讀せられざるなく世上の讀者常に其一冊に集まらむことを熱望して止まず本店並に先生の近作を集め舊作の粹を抜く純爛と平淡との對照面白く而かも仰ぐべき人格の美一貫して躍動す燈火箱親むべきの侯讀書家の机上此絶好の一席無かる可けんや

風流戰

撫子著

柳の緑、花の紅、風流戦は粉黛散り、撥飛ぶ風流の大合戦肥也加ふるに一代の美妓萬龍、文光、小るん、三勝の情話、源雲大夫、國寶三萬圓の由来及び美麗な寫眞數葉を挿む折花柳の風流兒四疊半裡此書を綴りて人生の風流を味へ

定價四十五錢 送料六錢

眞山青果著 (上製)

小 四十二年

定價七拾錢 送料八錢

眞山青果氏は自然派の大家として世既に定評あり本書は氏が最近の傑作として好評を博せる櫻、壁の花、等を初めとし移轉前後、親戚、其他數編を輯む若しそれ當代の文學を味はばんと欲せば本書を讀むべし

中江兆民著 (菊版總クローヌ製函入)

兆民文集

死に臨み一年有半を著して文名を復活したりし中江兆民先生は實に明治の一大奇才なり其人物や其主眼見や其學問や其文章や凡そ隨處に群を抜いて永遠に生命あり然るに其作散逸して其面目は一般の中に隠れたり大方の君子願くは一本を座右に備へらむべし

定價壹圓七拾錢 送料拾貳錢

明治叛臣傳

吾國に於ける古來一切の叛臣は、一も朝敵たるものなく、只時の在野に反抗せし迄也。故に叛臣と云ふと雖も、其實熱烈の如きを以てし、この事のみ。此意を以て、筆舌を近なりとして、多くは名士なり、人なりと云ふべし。今夫等の人士に於て、多くは名に力あるも、實の史實は、日なちずして運滅に歸するあらんことを、これ本書のある所以也。

定價金五拾五錢 郵税金八錢

大町桂月編 田中貢太郎編

紅葉傑作集

傑作傑作の第一として出づ古今大家多く傑作多し此書紅葉の粹を採り、山程に在りて路に迷ふの恨あるを免れず此書紅葉の粹を採り、山程に在りて路に迷ふの恨あるを免れず此書紅葉の粹を採り、山程に在りて路に迷ふの恨あるを免れず

定價金五拾錢 送料八錢

伊藤銀月編

人物の神髓

古來東西の人物を捉へ來りて、一見其神髓をたたくに足るべき言行の粹を抜き、巧妙なる編纂法を以て一書の中に開闢以來の世界をコンパンスしたり、實に出版界の一奇觀にして、讀者于たる者必ず一本を座右に備へ、青燈の伴侶となさるべからざる也

定價金拾五錢 送料六錢

大町桂月 樋口龍峽共編

千波万波

本店先に「むら」を發行して、江湖の大喝采を博せり。今又此書を發行す。井上、新戸、芳賀の三博士を初め、龍崎、久保、小川、大町、馬場、木下、大野、廣津、柳、川、島、藤、伊藤、銀月、等數十の大家の論文あり、小説あり、紀行文あり、隨筆あり、現代文壇の粹を盡く、精を抜く、是れ文海の珍香、千波萬波の壯觀を極む。

函入上製 定價一圓廿錢 送料金拾貳錢

大町桂月序 小栗風葉跋 王春嶺著

現代二十八人

本書は現時の文壇に活動せる文士二十八人を選び、初對面の第一印象に依りて、其人物を縦横に評論せるもの也。著者の眼光直ちに人の肺腑を洞察して誤らず、筆路亦公平にして毫も私情に阿らず、此一書に依りて現代文士の人物を側面より遠慮なく観ふ事を得べし。

定價金四拾錢 郵税六錢



大町桂月、白河鯉洋共編  
笹川龍風、樋口龍峽共編  
新編 入約六百頁  
當代の名書叢書挿入

再版  
是れ魯賓孫氏の感問集也小説に激石、林葉、風葉、鏡花、青果在り  
論文に三宅、藤岡、姉崎の三博士在り、佐々園雪、内村鑑三、美  
文に桂月、笹川、登張の(サラストラ)紫影の(ツルネネーフ)紅  
緑の(英詩對句)執筆の諸大家四十餘名文星燦として輝く一編悉く  
是れ魯賓孫玉の文字實に文理の大傳也

再版  
網島梁川譯 (製本優美) 菊版函入  
定價壹圓五拾銭  
送料拾貳銭  
郵税金八銭

再版  
ルナン 耶穌傳  
定價壹圓五拾銭  
送料拾貳銭  
郵税金八銭

再版  
寄 波  
定價五拾五銭  
郵税金八銭

本書は田岡義興先生の傑作を編み、短編あり、論文あり美文あり、皆一代の名文、机邊の好伴侶、好文の士必讀の好文集也

田 口 掬 汀 氏 作

新 作  
説小 猛 火  
定價壹圓廿銭  
送料八銭  
大冊 クロース  
製 美 本

薄志弱行の小説のみ産出せらるゝ時、感奮の高潮に達したる人物を描きて、雄大の氣魄を示せる此大作の出でたるは現時の文壇空谷を穿つての感あるべし、軟弱媚柔の作物に倦厭したる讀者には必ず此大作を一讀せられよ

朝日新聞評 小説女夫波は明治文壇の傑作にして予は此作を讀みて少なからぬ感動を得たと共に淫猥の作多き小説界に此傑作の出でたるを愉快とするものなり

十 版  
伯 爵 夫人  
定價各八拾銭  
送料八銭

二六新聞評 意志に強き男子が一念の轉機と智に敏き女子が纏綿の情を相結び、讀者をして運命の數寄に泣かしめ、可憐なる二孤兒の身上に萬斛の涙を注がしむ、道は人生の奇蹟を拓ける小説にして總ゆる階級の讀者を感動せしむ可き傑作ならん。

樋口龍峽著  
社會論叢  
定價五拾五銭  
郵税金六銭

小松小兒科院長 小松貞介先生著  
實 驗 小兒保育法  
定價四拾五銭  
郵税金八銭

安部磯雄著  
應用市政論  
定價壹圓廿銭  
送料拾貳銭

伊藤銀月著  
説小 怒 濤  
定價八拾五銭  
郵税金八銭

是れ一氣呵成一百二十餘回に連れる雄辯を披けば直ちに怒濤の面を打ち来るを覺ゆ眞率なる新學士流夫の子たる絶大の美人隱れたる偉人なる其父毒悪なる青年老翁なる富豪其他篇中の人物盡く特殊の面目と性格とを以て活躍飛動す而も其結構の肝大と抽寫の精刻とに伴ふに當代無比の妙文を以てす蓋し一時の投機的作物にあらず眞の小説を讀まんとする者は此書を逸すべからず

現代人士の煩悶を知らんとする人は必ず此作を一讀せられよ、此書には物質的文明の弊を受けたる人と高潔なる理性に依て活きんとする人との心情、動作等最も明瞭に寫されたり。

江見水蔭著  
説小 女 馬 賊  
定價九拾銭  
郵税金八銭

文學的の冒險小説時化されたる事實談は是也著者獨得の筆筆を揮ひて文壇に此方面を開發す自然不自然を論ずるの邊なく一讀せざる可らざるの快著なり。



綱島梁川著 (菊判總タローズ頁數約千頁)

梁川文集

定價 二圓二拾五錢 郵稅 拾貳錢

梁川綱島先生高邁博大的識、精麗理到の旨、恰も燭を把つて照す如し。其の先生は、博學多聞にして、他國の學者に非ず。一面冷靜細心の頭腦を備へたる倫理學者にして、他國の學者に非ず。一面冷靜細心の頭腦を備へたる倫理學者にして、他國の學者に非ず。一面冷靜細心の頭腦を備へたる倫理學者にして、他國の學者に非ず。

伊藤銀月著

偉人達人

定價 卅五錢 郵稅 六錢

奇を愛する銀月先生が興味を以て古今東西二百有餘の偉人達人を、選りし其人物の眞骨頂を顯如たらしむべき代表の一二の行動を、抽寫し添ふるに、動拔なる短評を以て、其の偉大なるもの、顯るなるもの、偉人の面目々々人に、逐る眞に、人界の大觀奇景也之を、讀んで、凡骨を練磨すべく有爲の氣血を養成するに足るべし。

伊藤銀月著 小杉未醒畫(挿繪十枚)

新譯水滸傳

定價 八拾五錢 送料 拾貳錢

水滸傳は支那の叛骨養成書也。其革命経也。風雲變幻の急にして、革命の火氣大陸に燃ゆる。今日、本書は新に出でたる物の如く、時代の人の歡迎せらる。朝野より、延いて支那を我と混一視するの抱負ある日本男兒は、必ず之を讀むべし。されば、馬蹄關山の騁は、唯だ其皮相のみ、銀月の言文一致の斬新なる、譯文成りて、原著却つて、顔色を失ふを見る。未醒君の挿繪と相俟つて、現代第一の奇書也。

小川芋錢著

草汁漫畫

定價 六拾錢 送料 八錢

古人曰文章拙を以て成ると芋錢子の畫は則大拙なり其明ゆる妙想奇致なる香も、則拙中の一味に、過ず雅致の士希くば一本を購ひて、清賞を賜へ。

大町桂月著 (製本美)

代表日本人

定價 八拾錢 郵稅 八錢

日本人を化せしは、區々たる教義にあらずして、事實也。歴史也。國體也。祖先の發揚せる國民性也。我が國には、儒教佛教以外、一種の武士道ありて、今日の發展を致したる事、今更言を得ざる所なるが、武士道の眞相を知らむとせば、理論のみにては、不十分也。之を人物事實に徴せざるべからず。此書日本國民の特性を發揚せる人を、擇びて、其面目を描き、日本國民の前路に、光明を與へ、教訓を與ふ一風、變はれる日本國民の歴史也。兼れて、道徳經也。

大町桂月著

我が文章

定價 四拾八錢 郵稅 六錢

桂月先生の文章、愈老熟して、縱横自在、眞情流露し、行く處に行き止る處に止まり、豈の術ふ所なく、苦む所なく、直ちに人を以て文を遊り、洒落飄逸に、快閑にして、男性的意氣を、發揮し、而かも、冒外に、情熱溢る文、此に至れば、鄙なり、先生の文の如きは、當代の逸品なり。

海老名正先生著

基督教本義

定價 五拾五錢 郵稅 八錢

基督教の本義、果して如何之れか、明白なる解答を與ふるもの、古來宗敎史上に、光明を放てる預言者、教師、教主の、抱懐せる思想、經驗に、依らざるは、なし。本書は、基督教の、明星、海老名正先生、卓抜の識、勇健の筆、を以て、上げ、モーゼより下は、ルイ・パウル、シユイ・エル・マツヘルに、到る迄、正確に、偉人の、偉業を、明かに、し、斯敎の本義を、説明せられたるも、也。幸に、愛讀の、榮を、賜へ。

大町桂月先生校閱 文士 小松武治譯

註沙翁物語集

定價 七拾錢 郵稅 八錢

水滸傳は、沙翁戯曲中、最も有名なる、四大悲劇、四大喜劇に、加ふるに、ロメオ・ジュリエット、エフタ、及、冬物語、等、通じて、十編の物語を、採り、精緻なる翻譯を試み、懇切なる註解を、施し、加ふるに、數種の附録を、以て、す。特た、文科大學、講師、先生、の、校閱を、仰ぎ、たる、者にして、荷、も、沙翁戯曲の、何き、たる、や、を、窺、は、んと、欲、する、の、士、は、須、ち、く、一、本、を、購、ふ、て、座、右、に、備、ふ、べし、也。

匿名隱士著

破天入論

定價 拾錢 郵稅 四錢

天下を風靡したる天人論に對つて、逐條討議的に、當々駁論を試み、三や、哲學の、宇宙觀と、人生觀とを、鼓吹したる、其、快の、書也。本書の、出づるが、如何に、愛讀せらる、か、を、知る、べし。

大町桂月著

わが筆

定價 四拾五錢 郵稅 六錢

嘲罵の中に、涙あり、放言の中に、眞理あり、教訓あり、才氣あり、筋氣あり、刺は、酒脱に、或は、沈痛に、或は、眞面目に、或は、謙遜に、短くして、寸鐵人を、行るに、權活の、才、筆、を、以て、する、而、かも、實、は、一、風、の、氣、と、熱、を、以て、し、到る處に、充ち、才、情、揮、す、べし、美、文、も、その、間に、光、彩、を、放、つ、天地、間、有、數、の、活、文、字、也。

大町桂月先生選

時代青年文集

第一卷 郵稅 六錢 第二卷 郵稅 六錢

桂月先生、最も、青年を、愛し、指導、教訓、須臾も、懈ら、ず、愛に、満ち、天下、青年、諸子の、傑作、數十、篇、中、より、其、尤、なる、者、を、採、り、正、なる、批評、を加へ、て、時、代、青年、文集、を、編、せら、る、收、む、る、所、叙、事、抒、情、あり、論、評、あり、將、た、新、體、詩、あり、成、文、あり、花、の、如、く、想、熱、火、の、如、く、以て、青年、の、煩、悶、を、抒、す、べし、元、氣、を、鼓、舞、す、べし、附、録、には、當代、諸、名家、の名、篇、を、添、へ、て、錦、上、更、に、花、を、飾、る。

大町桂月著

家庭と學生

定價 拾八錢 郵稅 六錢

著者申す、我れに、三男一女あり、其れを、斯く、は、し、つ、け、む、我れも、斯く、は、覺、悟、せ、む、と、心、に、期、する、の、み、に、て、能、く、實、行、す、と、斷、言、し、得、べ、き、身、の上、な、ら、れ、ど、家庭、教育、の、大、切、なる、事、を、今、更、の、や、う、に、感、じて、感、者、の、一、得、も、や、と、世、の、青年、男女、の、前、に、呈、し、合、して、世、の、父、兄、の、前、にも、呈、する、也。



# 机上圖書館

全部 定價貳圓八拾錢  
完成 函入 送料拾六錢

本書は全部八冊を一秩として机上圖書館と表記したる雅致ある箱に収めたるもの也苟くも書籍に興味と實益とを求めんとする時之を開かば坐ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや

## 伊藤銀月編

- 第一編 歴史要領 定價三拾五錢 郵税六錢
- 第二編 地理主點 定價三拾五錢 郵税六錢
- 第三編 科學新潮 定價三拾五錢 郵税六錢
- 第四編 法制綱要 定價三拾五錢 郵税六錢
- 第五編 新家庭觀 定價三拾五錢 郵税六錢
- 第六編 文學概說 定價三拾五錢 郵税六錢
- 第七編 成功指針 定價三拾五錢 送料六錢
- 第八編 人物の神髓 定價三拾五錢 送料六錢

文學博士 桑木嚴翼著 (四六判總クローソ)

### 性格と哲學

定價壹圓廿錢 郵税金八錢

英國 アール、ビー、ブーザアス著  
日本 松居 松葉 譯

### 市營と私營

定價四拾五錢 郵税六錢

社會學專攻文學士 樋口龍峽著

### 社會主義と國家

定價拾五錢 郵税貳錢

岩野泡鳴著

### 新自然主義

定價五拾五錢 郵税六錢

齋藤無絃著

### 小天國

定價六拾五錢 送料八錢

### 安全なる結婚

定價拾八錢 郵税金四錢

小栗風葉 小川獸水 合作

### 小説 女

定價七拾錢 送料金八錢

小栗風葉著 編木清方畫 (上製美本)

### 小説 十七八

定價七拾五錢 郵税金八錢

戶張孤雁著

### 孤雁挿畫集

定價五拾錢 郵税八錢

伊藤銀月著

### 小説 出潮

定價六拾錢 郵税八錢

半井桃水著

### 小説 濡衣

定價六拾錢 送料八錢



田口柳汀氏著 (清方書挿畫三枚)  
**恨**  
 定價金壹圓  
 郵稅八錢

理學士(數學專攻)河野徳助著  
**初代數學講義**  
 下上  
 定價各壹圓  
 郵稅八錢

徳田秋聲著 (上製美本)  
**小母の血**  
 定價七拾錢  
 郵稅八錢

瀧田泣菫君題詩 小島烏水君序文  
 浦原有明君序詩 清水橋村君著  
**新體筑波紫**  
 定價四拾錢  
 郵稅六錢

半井桃水著  
**小萩の下露**  
 定價六拾五錢  
 送料八錢

凡鳥山人著  
**馬鹿物語**  
 定價四拾錢  
 郵稅金六錢

大町桂月先生序 角金潮聲著  
**宇宙と人生**  
 定價貳拾五錢  
 郵稅金四錢

景山英著  
**妾の半生涯**  
 定價三拾五錢  
 郵稅六錢

川上眉山著 ○清方書 (上製美本)  
**小觀音岩**  
 前後各八拾錢  
 送料八錢  
 合本一圓卅錢  
 送料拾貳錢

佐々醒雪 白河鯉洋序 稻田薄光編  
**家庭名論卓説**  
 定價四拾五錢  
 郵稅八錢

櫻庭篁村著○清方書 (上製美本)  
**小竹影集**  
 定價六拾五錢  
 郵稅金八錢

伊藤銀月著  
**社會高原生活**  
 定價四拾錢  
 郵稅金六錢

大町桂月序 有倫堂編纂  
**明治大家文集**  
 定價八拾錢  
 郵稅金八錢

田口柳汀氏著  
**小獨木舟**  
 定價金四拾錢  
 郵稅金六錢

天野誠齋編  
**名流身體健康法**  
 定價二拾五錢  
 郵稅金六錢

半井桃水著  
**小寶**  
 定價金六拾錢  
 送料八錢

岩野泡鳴著  
**闇の盃盤**  
 定價三拾八錢  
 郵稅金六錢

大町桂月先生 中内蝶二先生合著  
**少女と山水**  
 定價三拾五錢  
 郵稅金六錢

田岡嶺雲著  
**霹靂鞭**  
 定價四拾五錢  
 郵稅金六錢

田口柳汀氏著  
**劇熱血**  
 定價三拾錢  
 郵稅金六錢

小栗風葉著 (美術的製本)  
**小新粧**  
 定價四拾五錢  
 郵稅金六錢

大町桂月 伊藤銀月刪修 天籟寫  
**文士寶典**  
 定價五拾錢  
 郵稅金六錢

櫻庭篁村著○鐫木清方書 (上製美本)  
**小不問語**  
 定價七拾五錢  
 郵稅金八錢

齊木仙醉對佛國神學教授ボア博士  
**三位一體論**  
 定價貳拾錢  
 郵稅金四錢



文學士 久保天隨著

### 文壇獅子吼

定價四拾五錢  
郵税金六錢

泉鏡花著○清方畫 (上製美本)

### 小無憂樹

定價八拾五錢  
郵税金八錢

文學士 久保天隨著

### 紀行山水寫生

定價四拾五錢  
郵税金六錢

海老名彈正先生著

### 人道

定價金拾錢  
郵税金二錢

チヨサイア、スフロンク原著、石川三四郎譯

### 二十世紀の大覺醒

定價三拾錢  
郵税金四錢

文學士 久保天隨著

### 美文夕紅葉

定價三拾五錢  
郵税金六錢

櫻庭篁村著

### 紀行天下泰平

定價四拾五錢  
郵税金六錢

德田秋聲著

### 小花たば

定價四拾五錢  
郵税金六錢

萬朝報記者 茅原華山編纂

### 青年と詩吟

定價貳拾五錢  
郵税金四錢

泉鏡花著○清方畫

### 小誓之卷

定價七拾五錢  
郵税金八錢

日高有倫堂編

### 基督教講壇集

定價七拾錢  
郵税金八錢

茅原華山編纂

### 我一人

定價貳拾錢  
郵税金六錢

高橋五郎著

### 英語實驗百話

定價參拾錢  
郵税金六錢

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

### 向上の一路

定價三拾錢  
郵税金六錢

戸川秋骨著

### 時代私觀

定價四拾五錢  
郵税金六錢

半井桃水著 清方畫

### 小慰問袋

定價七拾五錢  
郵税金八錢

醫學士 佐藤得齋著

### 美的衛生

定價金四拾錢  
郵税金六錢

醫學士 佐々木多聞著

### 新化粧

定價四拾錢  
郵税金六錢

本居豐穎撰

### 紫文摘英

定價三拾五錢  
郵税金四錢

海老名彈正著

### 宗教々育觀

定價五拾五錢  
郵税金八錢

鈴木秋子女史著

### 軍國の婦人

定價二拾八錢  
郵税金四錢

苦學社編輯

### 苦學の伴侶

定價三拾錢  
郵税金四錢

横山筆助著

### 成功したる應用自在

定價參拾五錢  
郵税金六錢

催眠暗示術 シルレル原著 齊木仙醉譯

### 接神術

定價貳拾貳錢  
郵税金四錢



4258

泉鏡花著

小説ななむと櫻

定價四拾錢  
郵税金六錢

齊木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價參拾錢  
郵税金四錢

加藤直士譯

トルストイの白露戦争觀

定價參拾錢  
郵税金四錢

高橋五郎著

杜柏品藻

定價參拾五錢  
郵税金六錢

廣風秋元喜久雄譯

獨逸詩集紅粉集

定價三拾五錢  
郵税金四錢

文學士 小原無絃譯

原文ハトンスの詩

定價三拾錢  
郵税金四錢

杉山先生書簡 黒澤或三郎編

名家手簡

定價參拾錢  
郵税金六錢

文學士 小原無絃譯

原文シェーラーの詩

定價三拾五錢  
郵税金四錢

泡鳴著

新體詩集悲戀悲歌

定價三拾五錢  
郵税金四錢

泡鳴著

新體詩集夕潮

定價三拾五錢  
郵税金六錢

細越夏村著

新體詩集靈笛

定價三拾錢  
郵税金四錢

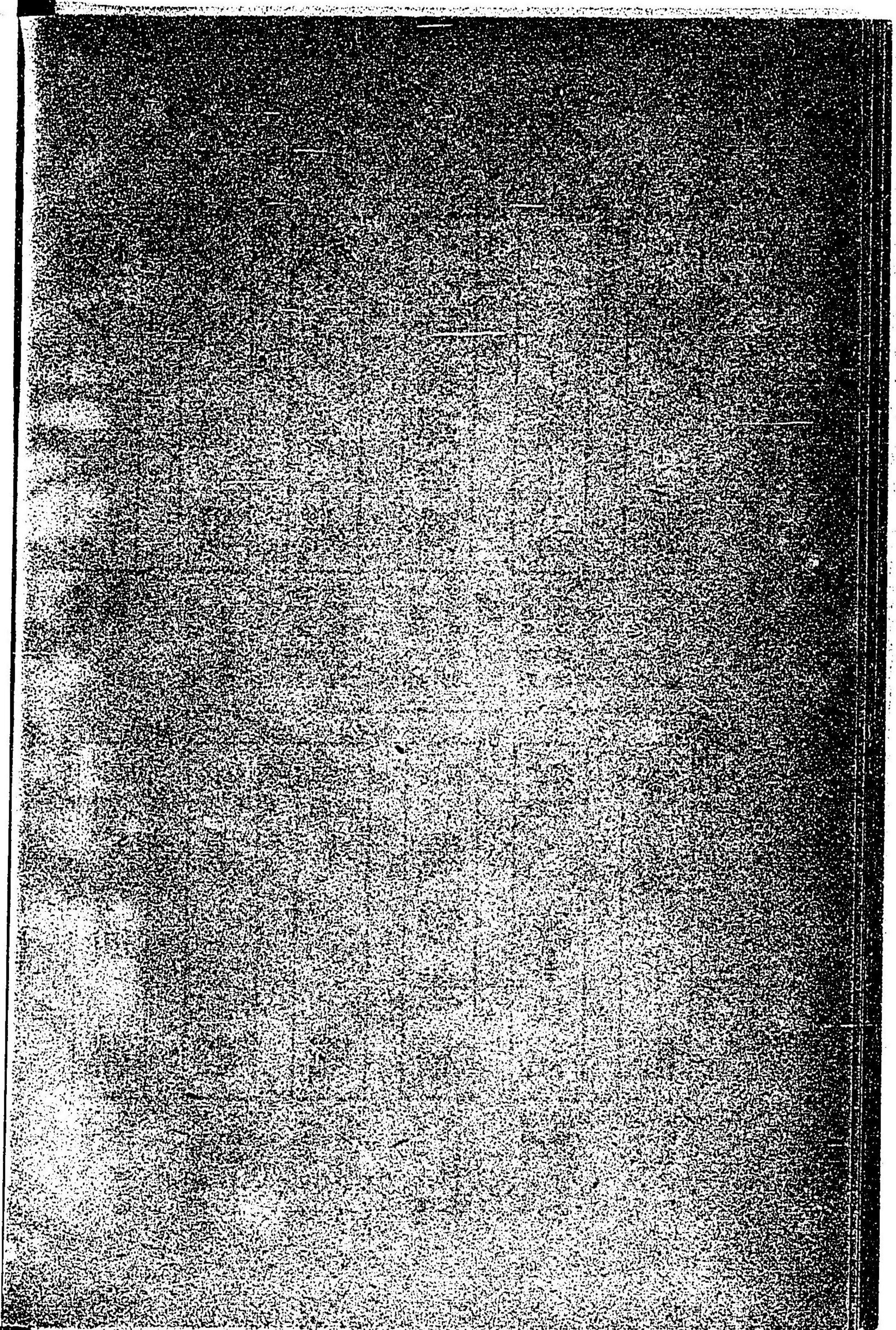
秋元蘆風譯

獨逸詩野葡萄

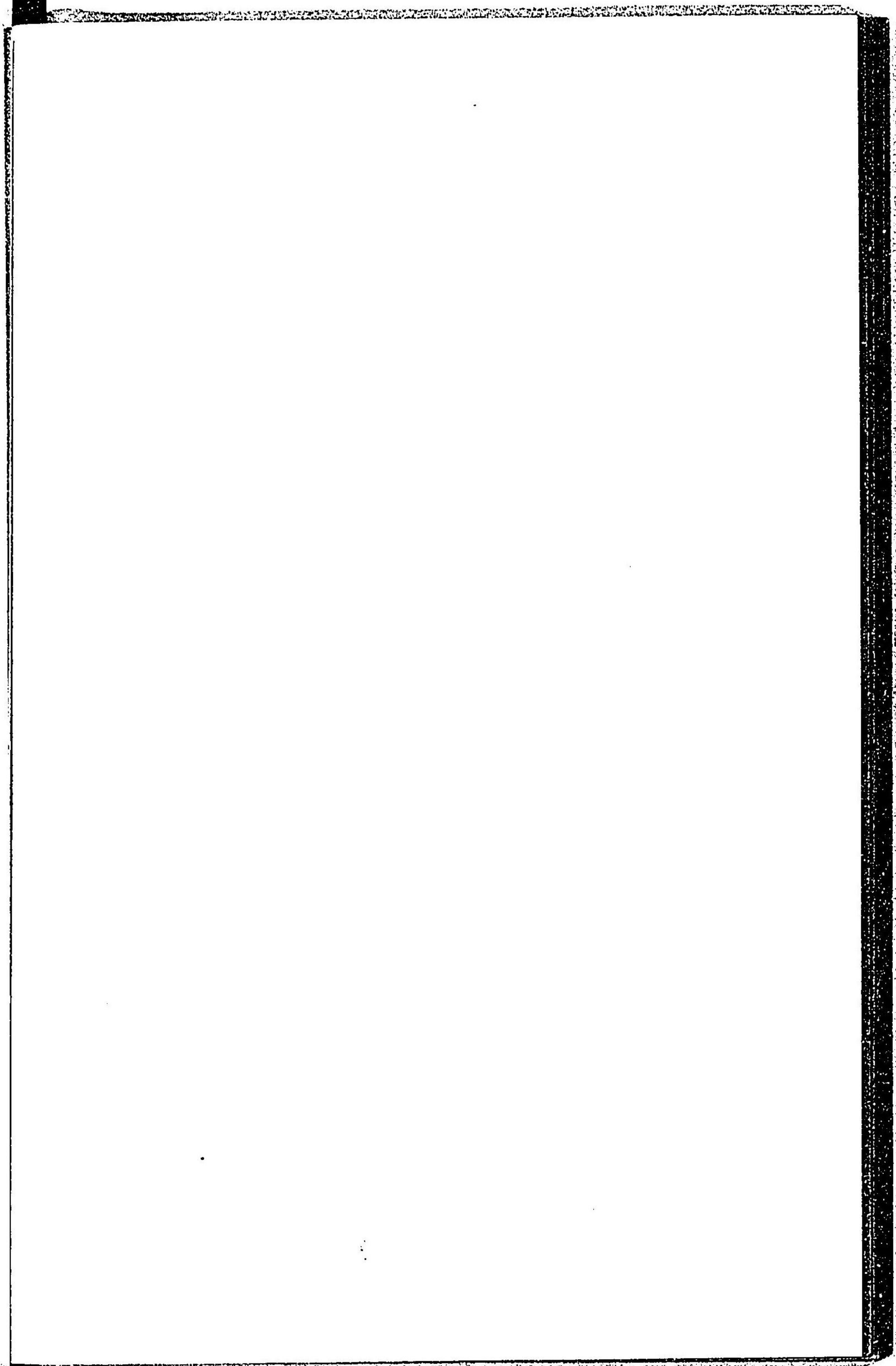
定價三拾五錢  
郵税金六錢

○原文對照 ○卷末に評註を附す

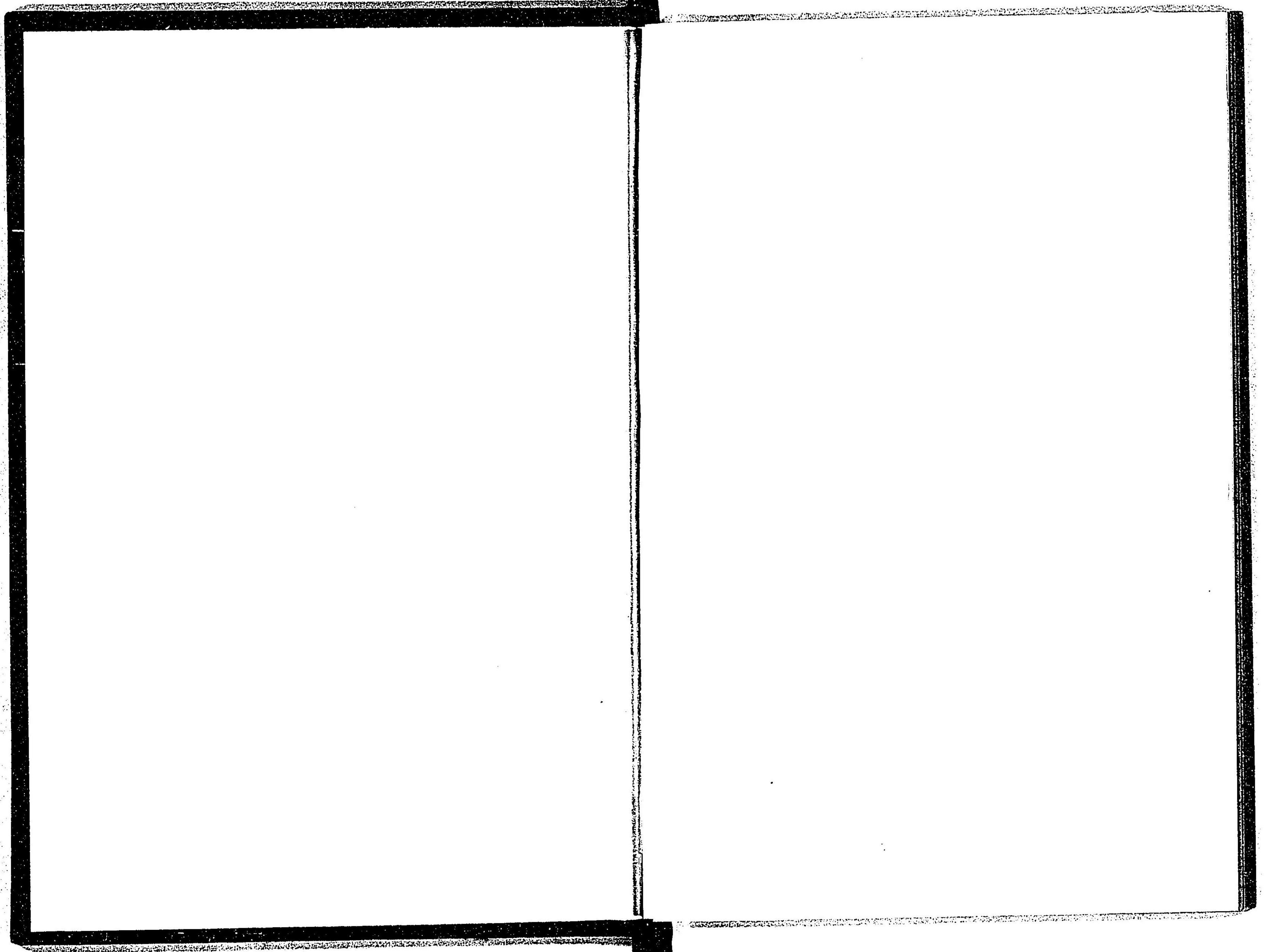




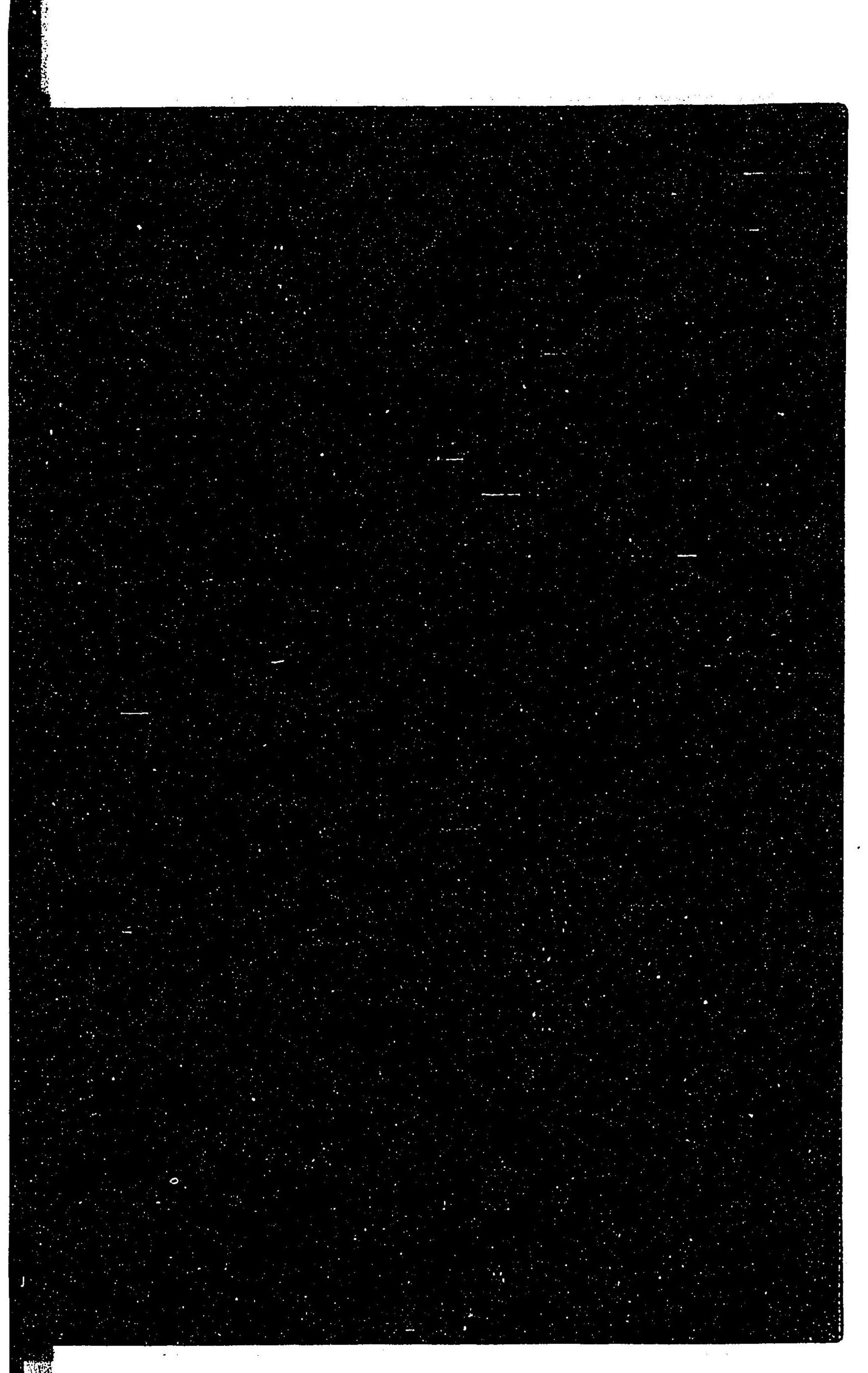














210.6  
Ta898m

005096-000-4

210.6-Ta898m

明治叛臣伝

田岡 嶺雲/著

M42

ACE-1897

